

第9章 改革開放の光と影——中国東北部を訪ねて

大阪経済大学 平等文博

改革開放政策によって、とりわけ天安門事件以降、中国人の生活様式や価値意識は都市部を中心に大きく変わりつつある。それにともない、中国共産党の政治支配のもとでこれまで維持されてきた社会的・個人的モラルの崩壊とその再編成も当面する大きな課題となっている。しかし経済自由化の奔流は、事態の思想面、文化面での反省を待つことなく、人びとの生活と意識を有無を言わさぬ現実の力をもって押し流している。その結果中国は現在、専門の中国ウォッチャーにおいても繁栄（楽観論）と崩壊（悲観論）というまったく正反対のシナリオが予測される光と影の両面を抱え込んでいる。

以下は、2000年夏と2001年冬の2回にわたり共同研究の視察旅行で中国東北部を訪れた時の私的見聞を体験記風にまとめながら、改革開放の光と影の寸描を試みたものである。

大連

私たちの共同研究の重要な協力者である東北財経大学のある大連市が、私が参加した二度にわたる中国東北部（遼寧省・吉林省・黒竜江省）視察旅行の出発点であり拠点であった。

中国東北部随一の港湾都市として栄えてきた大連は、経済開放によって多くの外資系企業が進出し、商用や視察に訪れる外国人も多い。北京や上海は言うに及ばず、中国の主要都市では高層ビルや高速道路などの建築ラッシュが今も続いている。特に大連は、中央政界有力者の子息だという現市長がそのコネクションも最大限活かしてであろうか、都市環境の整備に非常に力をいれているとのことで、町中のいたるところに芝生の緑が映え、歩道も煉瓦タイルで敷き詰められて、これまで私の訪れた中国の都市のなかでは群を抜いた美しい景観を見せていた。かつての塩田を埋め立てた海沿いの広大な造成地は、芝生に覆われたただっ広い公園になっており、見本市会場など新しい施設がポツポツと建ち始めている。

市中で目をひいたのは、日本では高度経済成長時代に次々と姿を消した路面電車が、今も市民にとっての重要な公共交通機関として活躍していることだ。なつかしい旧型の車両が走る既設の路線に加えて、スマートな最新型車両を投入した新しい路線も開通しており、路面電車が単なる過去の遺物ではなく将来にわたって市の公共交通機関の要と位置づけられていることが分かる。また、香港復帰ののち二階建てバスを導入する都市が中国では増えているそうだが、大連でもたくさん走っていて市民の足となっている。

日中国交回復直後の70年代半ばに訪中経験のある人によると、近年、中国都市部の街並みやファッションは、当時と比較して別の国かと思まがうほどに変わったと言

う。私にはそのような経験はないのだが、大連の街を歩く人びとからも、市民の生活水準が一般的にかなり高くなっていることが容易に見て取れる。市内のあちこちに動物病院が開業しているのを見ても、ペットを飼って病院に連れて行くほどの経済的余裕が生まれているのかと思う。

市内の再開発では、商用ビルやホテルだけでなく、新しい集合住宅が次々と建設されている。大連の周水子空港に初めて着いたとき、飛行場の周囲にパステルカラーの外壁をした新しいしゃれた集合住宅が数多く建ち並んでいるのがひときわ目についた。近年、住宅の個人所有が認められそれが奨励されるという状況になって、より条件のよい住宅を手に入れることが個人のステータスを表すものでもありまた生活目標ともなって、住宅建設が加速している。だが、中国においても家を買う資金の調達は庶民にとって容易なことではなく、個人向けの「住宅ローン」もあるようだが、たくさん建てられている集合住宅の中にはなかなか売れずに空き家の多いところも実は少なくないようである。

にもかかわらず2度目の大連訪問時には、市郊外の高級住宅街で日本のバブル期の言い方では「億ション」とも呼ぶべき超高層マンションが三棟建設中であり、遠くからもその威容を眺めることができた。どのような人びとがこうした高級マンションの購入者となるのかは分からないが、いずれにせよそうした富裕階層が生まれてきているということは事実なのであろう。

その秘密をかいま見る一つのヒントとして次のような話を聞いた。東北財経大学の教員たちは、中国の大学や企業が一般にそうであったように、以前は大学の敷地内に建てられた教職員用の集合住宅（日本風に言えば社宅）に居住していた。ところが持ち家制度が導入されるにともなって、大学はその住宅を入居者に格安で買い取らせた。さらにこのたび大学は有能な教員を集める方策としてなのか、博士号をもつ上級クラスの教員に限って新たに住宅を購入する場合には多額の助成金を支給するという特権的な制度を設けたというのである。それによって、例えば58万元（為替換算では約一千万円）する150平米の広い新築マンションを購入しようとする、38万元（同、約650万円）が大学から助成されるので、格安で払い下げられた今の持ち家を売却すれば代わりにただ同然でそれが手に入るというのである。改革開放にともなって、成功をおさめた有力な企業や組織においては、政治と直結していたこれまでの特権とは位相を異にする新しい特権がさまざまな形でつくられ、その恩恵に浴する富裕層を生みだしているのではないかと考えられる。

混沌と規律

中国では自動車が急速に普及してきているが、交通ルールに関する認識は非常に乏しい。信号や横断歩道も大きな交差点以外は未整備で、歩行者がところかまわず道路を横断する。道路を横断中の歩行者に迫る車、さあ避けるのはどちらか？——答えは「勇気のない方」だというジョークを以前に中国人ガイドさんから聞いたが、それはかなりの程度実態でもある。また、道路の中央分離帯も白い二重線が路面に書かれ

ているだけだから、その時々交通事情や運転者の判断と彼我の力関係によって自在に変更される。片側二車線の対面通行道路が、いつのまにか三車線と一車線の道路に変わっているなど珍しいことではない。当然のことながら交通事故も多発しているようで、ちょっとした衝突や追突程度の事故なら市中をしばらく走れば必ずと断言するほどお目にかかる。

長春で国産最高級乗用車「紅旗」で有名な中国最大の自動車会社中国第一汽車集団公司（「中国一汽」）の工場と関連会社を見学したときのこと、約束の時間より早く着き正門の外でしばらく待たされたので、正門に続く道の両脇にずらりと並べてある立て看板を時間つぶしにのぞいてみると、交通安全の啓発であった。助手席の彼女が「他心里没有我！」と不審の眼を彼に向けるが、運転する彼の心の中にあるのはハートに包まれた「安全行車」だという、「誤解」と題したほほえましい看板がある一方で、悲惨な交通事故現場や激しく損壊した遺体の生写真をこれでもかと貼り付けた「血的教訓」という正視に耐えぬものまである。テレビでも横断中の人々が車にはねられる実際の映像を流して「無謀な横断は止めよう」と呼びかけているのを見たことがあるが、こうまでしても交通ルールが定着しつつあるとは言い難い。

大連から旅順に向かおうとした時のこと、市街地を抜けようとするあたりで車が渋滞にひっかかった。突然けたたましい警笛音が聞こえる。何かと思って見ると、左側からわれわれに向かってディーゼル機関車が徐行しながら突っ込んでくるのが見えた。そこで初めて、警報機も遮断機もない踏切をふさいで車が渋滞していたことに気づいた。機関車は警笛を鳴らしながらじわじわと前進し、渋滞の列に横からくさびのように食い込んでくる。車の方が踏切の手前で停車して線路を空け、機関車を先に通してしまえば早いのだが、中国のドライバーたちは絶対にそうはしない。機関車の先頭から少しでも距離があれば、車はおかまいなく鼻先を突っ込んで先に進もうとする。そうはさせまいと機関車も警笛を鳴らしながら強引に前進してくる。

ながながと交通事情について書いてきたのも、諸個人や諸団体が自分の利益を最優先にして「われがわれが」と他を押しつけながら行く先を目指すこの混沌としたありさまこそ、中国社会の現状を象徴的に表しているように思えるからである。

各人に共有された公的規範に基づく自律的な秩序がうまく形成されないままに個別利害のみがアナーキーに主張されると、当面の方策としては外的な規律によってそれらを強制的に規制するしかない。

大連市内をバスで走っていると、ちょうど新学年の始まりの日だったので学校では生徒たちが校庭に出て整列したり行進したりさせられているのが見えた。生徒たちはみな緊張した風で、かつて日本にもあった一種軍隊的な集団の規律がここではまだ生きているようである。規律の訓練は学校だけではないようだ。たとえば街のレストランでウェイトレスやウェイターたちが制服姿のまま店の前に整列して体操をしたり、二列縦隊で駆け足するという光景にも一度ならず出くわした。こうした軍隊的な規律と先に述べたカオス状態とが現在の中国というメダルの裏表をなしている。

この規律の要は、政治の実権を事実上一元的に掌握する中国共産党である。それ

に対しては中国の政治的民主化を阻む最大の障壁として内外から強い批判が浴びせられているが、ソ連共産党の急激な解体にともなう大きな混乱と同じような事態が中国で再現されるのを望む人はいないだろう。以前に國務院のシンクタンクである中国社会科学院の面々と会談したときも、彼らの最大の関心事はいかに「ソフト・ランディング」させるかであった。

東北財経大学の先生たちと昼食を共にしていると、「三講運動」の話が出た。新学年が始まったのに加えて、そのための会議でとても忙しいというのである。「三講運動」とは、要するに腐敗撲滅のための自己点検運動で、政治学習の会合を重ねながら自己批判的に組織や個人の問題点を洗い出し改めるといふ共産党指導による一種の整風運動である。運動が一定の段階に達すると上級党組織の幹部が現場にやってきて、運動のやり方やそれが十分な成果をあげたかどうか点数をつけて評定する。それで合格点がもらえないと大変なことになるので、そのための準備でとても忙しいというのである。

だが、責任問題になりかねない幹部たちはピリピリしてこの運動に取り組んでいるようだが、腐敗撲滅という肝心の目的達成について言えば、「こんなことをしても何も変わらない」というのがどうも一般教職員の偽らざる本心であるように感じられた。なにより規律の要をもって自認する共産党の政治支配自体が腐敗の温床になっているというこのパラドクスが、笛吹けど踊らずという白けた雰囲気を生んでいるに違いない。かといって、宗教団体・法輪功に対する過剰とも思えるような弾圧姿勢にも見られるように、共産党の政治支配に服さない団体や運動に対する極度の警戒からして、独立労組や自由な市民運動などが中国で育つ余地は今のところないだろう。混沌と規律が相互に転化しながらの危うい道行きが続く。

開放の波

東北財経大学での学術交流会で、中国東北部の経済の現状と諸困難について話を聴く。中国東北部は豊かな天然資源に恵まれ、中国の重工業の拠点地域であった。だがその豊かさが災いして、資源の過剰な収奪（日本占領下のそれを含めて）が長年にわたって続いたため、今では資源枯渇の危機に瀕しているという。またかつてつくられた重厚長大型の国営企業が多く、企業改革や産業構造の転換も簡単には進まないようだ。大連の街並みの明るさや表面的な活気とは裏腹に、経済学者たちの口から楽観的な見通しはなかなか語られなかった。

しかし、改革開放は一層の市場経済化と中国のグローバル経済への組み込みを加速しており、中国は否応なく開かれた社会になるべく動かされている。若い女性のファッションも敏感に近隣諸国の流行を反映し、ハルビンの街頭でも厚底靴（サンダル）を履いた女性たちが闊歩している。こうした情報をもたらすメディアとしては、地域によっては直接受信が可能な外国の衛星放送テレビや中国でも普及しつつあるコンピュータを使ったインターネットがあげられよう。

インターネットについては、当局はまだプロバイダの自由参入を認めておらず、

大元で規制をかけながら徐々に開放しようとしているようだ。延吉市の町中でPC—VAN（インターネット・カフェ）を見かけたので入ってみた。1時間5元の料金を払ってブースに入り、自由にネットサーフィンができる。ビルの1フロアを使ったかなり広い室内にはざっと見て30～40台ばかりのコンピュータが置かれ、十代後半から二十代前半の若者たちで盛況である。実際にいくつかの日本のホームページにアクセスしてみたが、転送速度が遅いのか表示に非常に時間がかかるものの、ともかくも見ることはできた。アクセス先に制限がかかっているのかどうか気になったが、ホテルに戻る時間が迫っていたために詳しく試してみることができなかった。だが、若い世代をはじめとして、インターネットは急速に身近な情報メディアになりつつあるようだ。

商文化においても変化が起きているようだ。長春で「中国一汽」の工場を見学した日の午後、国内外の企業を誘致するために新たに造成した経済開発区を訪れ、日系の自動車部品メーカーで日本人幹部から話を聞いた。「中国でモノを売るのはそう難しくはないんですがね、問題は代金の回収なんですよ」と苦勞話が語られる。「最近では契約を結ぶということが出来るようになってきたんで、だいぶ状況は改善されたんですが、以前は“ある時払いの催促なし”だったですからねえ……。」

中国人は長い商業の歴史をもっているので、「契約」という観念は当然あるものだと思っていたのだが、そうではなかったらしい。むしろ人と人との「信義」に基づいて取り引きをする。紙切れに書かれただけの「契約」などは信用しない。それはそれでしたたかな生きる知恵と言うべきだが、その「信義」には支払う側の事情を汲んで払えるまで辛抱強く待つ、すなわち「ある時払いの催促なし」が含まれる。それが今、「契約」に基づく取り引きへとようやく変わりつつあるというのである。経済の改革開放は、人と人との関わり方や文化面での変化を伴わずには進まない。

「満州国」の傷跡

長春は旧満州国の首都・新京で、今は共産党吉林省委員会となっている旧関東軍司令部、司令官の洋風の公邸、皇帝溥儀が閲兵したテラスのある旧国務院、敗戦のため土台しかできなかった皇居予定地（文化広場）など当時の政府（「偽満国政府」と呼ばれている）や中央官庁の建物が多く残る。

また長春は、日本敗戦後の国共内戦のさなかに国民党軍の支配下にあったため共産党軍によって封鎖され、取り残された多くの残留日本人を含め膨大な数の餓死者を出した悲劇の地でもある。勝利した共産党側にとってもこの悲劇は触れられたくない出来事として歴史の闇に半ば埋もれさせられてきた。封鎖都市長春からの地獄のような脱出行の体験を書きとどめた遠藤誉さんの『卡子チャーズ——出口なき大地、1948年満州の夜と霧』（読売新聞社、1984、現在は文春文庫に所収）が、数少ない記録である。

この本に載せられた当時の地図を頼りに、「チャーズ」（市外に通ずる軍の検問所）のあった辺りが見えるところまで行って見たが、そこはもう車の行き交う大通り

になっていて、当時を偲ぶものは何もない。案内をしてくれた長春市国際交流促進センター総経理の王蔓菲さんに、チャーズを知っているか尋ねた。字を示すとようやく解って「知っている」と言う。ただ、そんな年配でもない彼女自身が直接に知っているわけではなく、聞いたことがあるという程度のように、それ以上に話は進まなかった。

NHKのテレビドラマ「大地の子」（山崎豊子原作）の長春ロケにも協力したという王さんは、その代わりに彼女の知っているもう一つの「大地の子」の話を聞かせてくれた。

そのあらすじは、敗戦時の混乱で中国に取り残された日本人女性が、大学教師となる中国人男性と苦勞の末に結婚しやがて男の子を出産、しかし文化大革命の嵐がまた彼らの運命を狂わせ、彼女は故国の土を再び踏むことなくこの世を去る。大人になった息子は決意して母の国である日本に渡り、実業家として成功して今も日本に健在だという実話である。王さんは、友人を通して知ったというこの話を詳しく書きとめており、脚本化して映画にしたいという希望をもっているそうだ。中国人が心に受けとめたこの「大地の子」の物語が、どのような形にせよぜひ日の目を見て欲しいと切に願い、私は持参した『チャーズ』を彼女に進呈した。

日中戦争をはさんだ両国民の不幸な出会いは、今なお直接・間接の体験を通し清算されぬ過去として残っている。従軍慰安婦問題への日本政府の冷たい対応や、先の歴史教科書問題などによって傷は繰り返され再生産されている。日中両国民が歴史的に和解し未来に開かれた関係を創り出すためには、不幸な過去の出来事（侵略の事実）をわれわれ日本人がまず真摯に直視しなければならないだろう。

長春から瀋陽への列車の車中で、長春映画製作所（満州国時代の「満映」）で監督をしているという李華さん（75歳）と知り合った。日中戦争時には八路軍に従軍し日本語の通訳をしていたという。もう日本語はほとんど忘れたという彼とは、筆談とカタコトでの簡単な話しかできなかったが、今は好々爺然とした彼もまた、抗日戦争と国共内戦で数々の悲劇の現場（もしかすると長春封鎖も）を目撃してきたに違いない。後でお互いに撮った写真を送りあったが、彼からの手紙の末尾には、「祝中日両国人民世代代友好下去！」と記されてあった。

クリスマス

第2回目の東北部視察では、日本を発ったのが2001年の12月23日だったので、図らずもクリスマス・イヴを大連で迎えることになった。バスで市中を走ると、いたるところ商店のショーウィンドウにサンタクロースの絵が貼られ、「聖誕快樂、Merry Christmas」の文字が踊り、店に入るとクリスマス・ソングのBGMが流れている。「中国でもクリスマスを祝うの？」というのが、私も含めて訪中メンバー大方の驚きである。「こういう宗教的行事はいつから解禁になったのか」と大まじめな質問も投げかけられた。

「もう何年も前からこうですよ」と、通訳として大阪から同行してくれた中国人留學生の郭迪君が、「何をいまさら、当然でしょ」といった口調で答える。要は日本

と同じく、中国でもクリスマスはキリスト教信仰とは何の関係もない単なる世俗的なお祭りなのだ。若者たちにとってクリスマスは、仲間が集まって飲み騒ぐ格好の口実であり、商売人にとってはウキウキした気分で財布のひもを緩めさせるための演出に過ぎないのである。ここにも高度消費社会を豊かな社会と見据えて、そこへ向かってひた走ろうとしている中国の「今」が象徴的に現れている。

消費社会を拡大するうえでネックになっているのは、中国人の貯蓄率の高さであるということを知った。市井の人々が収入の多くを消費に向けずせせと貯蓄に回すために、近年の高度経済成長で潜在的な購買力があがっているほどには末端の消費が伸びないというのである。そのためにさまざまな工夫をこらしてモノを買わせようという思惑が、この「クリスマス商戦」に現れている。もちろんこのような現象は中国全体で言えばほんの一部、都市住民の間でのことであろう。農村部の貧困はわれわれの想像以上に深刻である。内モンゴル出身の朝鮮族で東北財経大学教授である金鳳徳先生が、宴会の席で隣に座った私に、「農村は貧しいですよ、農民は本当にかわいそうです」としみじみ言われたその横顔を、私は忘れることができない。

だが、「先に豊かになれる者から豊かになれ」というのが、「貧困の平等」からの路線転換を領導した鄧小平のかけ声であったから、貧富の格差は織り込み済みのことなのかもしれない。しかし、「豊かな都市」と「貧しい農村」で二分化できるほど、事は単純ではなさそうだ。

「中国人の貯蓄率の高さの一番の要因は何ですか？」と尋ねる私に、郭君は単純明快に「不安です」と答えてくれた。かつての国営企業は、程度の差はあれ、いわば“ゆりかごから墓場まで”を丸抱えした一つのコミュニティーであった。改革開放の最重要課題となった国営企業改革によって、コミュニティーから営利企業へと質的な転換が迫られた国営企業は、余剰従業員を職場に戻れる当てのない一時帰休（公式統計では失業者にカウントされない）でカットし、さらに福利厚生など非営利部門を切り捨てることで企業収益の改善に取り組んでいる。長春の「中国一汽」を訪れた時にも、急激なリストラが行われ30万人もいた従業員が1年ほどで16万人とほぼ半減したと聞いた。自立した労働組合の不在と保険など社会保障制度の未整備は、経済発展の華やかさと裏腹の不安感を人々の意識の底に広く深く醸成している。「お金を貯めて万一に備える」という庶民の自衛策に、クリスマス商戦がどれほど揺さぶりをかけられるのだろうか。

一方でこういう光景もある。大連で泊まったホテルのロビーに、冷蔵庫や電子レンジ、大画面テレビといった家電製品がガードマンの見張り付きで置かれてあった。その一角にしつらえられたデスクでは、サンタクロースの衣装を着た若い女性が受付をしている。それは、このホテルで開かれるクリスマス・パーティーの申し込み受付であった。入場料は一人880元とのこと。日本円では1万5千円弱であるが、それはあくまで為替レート上の話である。工場で働く女工さんの月収が600~700元程度であることを考えると、生活実感のレベルでは為替レートの換算にさらにゼロを一つ増やさなければならない金額の豪華パーティーである。くだんの家電製品は、そのパーテ

イーの余興として行われるくじ引きの景品だとのことであった。

誰がこのようなパーティーの客なのか。外国人の多く泊まる高級ホテルが会場なので「主に外国人相手だろう」と予想してみたが、大連で私たち一行の世話をしてくれた東北財経大学国際交流処日本科長の盧莉さんは即座にそれを否定した。確かに、見ている間にも30～40代かとおぼしき男性が一人申し込みに来て、何人分のチケットを買ったのか結構な数のお札を出して支払っている。「お客はほとんど中国人ですよ、実は私も去年パーティーに出席しました」と盧さん。チケットはもらったものだという。詳しい事情は聞かなかったが、勤労者の月収を上回るほどの高額なパーティー・チケットが購入され、また贈り物としてやりとりされるような世界の存在もまた、中国の今の一側面である。経済成長の持続によって、中国人全体の生活水準の底上げはしばらく順調に続くのかもしれない。しかし先に豊かになった者と取り残された者（いわゆる勝ち組と負け組）の格差が加速度的に拡大し、それが地域的、階層的に固定化の様相をいっそう明確にし始め、さらに権力機関や組織内部の不正・腐敗の問題が解決されぬまま続いた時、蓄積された不安や不満がどのような形で噴き出するのか——底知れぬ火種を抱え込みながら、街にクリスマス・ソングが流れる。

「ポスト天安門世代」

先にあげた郭君は、日本語が堪能で快活な25歳の青年である。父親は京劇の俳優だという。大連外国語大学日本語学科を卒業し、日本企業の現地法人で少し働いたあと留学のため大阪にやってきた。私が勤務する大学で研究生をしながら、この春に某国立大学の大学院に入学を希望している。

「天安門事件〔1989年〕後、経済制裁など国際的な批判のなかで、中国共産党は政治的自由の代わりに、民衆に経済的自由を与えることで、批判の矛先を抑え込んだ。“市場経済の春風”に乗って、民衆は古い体質から脱皮するとともに、新しい価値観を身につけたのである。こうした人たちを私なりに、“ポスト天安門世代”と呼んでいる。……若者たちのスローガンは、“下海（シアハイ）”＝ビジネスに身を投げろ。すべての論理はカネが優先される」（森田靖郎『カネと自由と中国人—ポスト天安門世代の価値観』PHP新書、2001、pp.16-18）。

森田の言う「ポスト天安門世代」にあたる郭君に、もはや政治の臭いはまったくない。タクシーに乗れば運転手とひっきりなしにお喋りをしながら、街の生活情報から運転手の収入や経歴まで巧みに聞き出すし、地方の名産店に行くと「僕は日本人観光客のガイドをしている、このお客さんたちに評判がよければあとでもっとたくさんの日本人を連れてくるからサービスしてくれ」とハッターリを効かせて「特別」に値引きさせ、お土産までもらうという如才のなさである。

学生時代にサークルをいくつか創ったというので何かと尋ねると、「エアロビクス・クラブにモデル・クラブに……」と言う。自分がモデルをするのではなく、モデル志望の学生たちを集めたサークルを創ってマネジメントをしていたらしい。

政治運動に明け暮れた時代がいかに遠いものとなったかを思わせたのが、長春で

昼食を取った田舎料理店である。その店では、部屋の壁一面に文化大革命当時の新聞がびっしり貼ってあり、そこに当時のスローガンが書きなぐられ、毛沢東のポスターなども貼ってある。けれどこれに政治的な意味はまったくなく、物珍しがってやってくる若い客を目当てに店主が知恵を働かせただけのことである。当時を経験した人たちには文革は苦く重たい記憶であっても、若い人たちにとっては異文化とさえ映る単なる過去の出来事のようなのだ。ちなみにこの店の入り口には、アメリカ製のオートバイ「ハーレー・ダビッドソン」がデンと客寄せに置かれてあった。

脱政治化しビジネスに身を投じる若い世代が、近年の中国における経済発展の原動力となっていることは間違いない。大連で、伝手を頼ってある民営企業の若いオーナー経営者白淙奎さんをオフィスに訪ねた。彼の会社は現在、韓国のアパレル企業からの委託生産を行っており、製品は直接日本に輸出しているという。朝鮮族である彼は、中国語とハングルそして学校で学んだという日本語の三カ国語を駆使しながら、国境を越えたビジネスに取り組んでいる。

もともとは国営企業に勤めていた白さんを独立起業へと駆り立てたのは、国営企業の官僚主義的に硬直化したやり方であったらしい。彼が苦勞してとりつけた外国企業との商談を、輸送部門のなかば意図的なサボタージュによってあやうくご破算にされかけた苦い体験を、白さんは今も腹に据えかねるといった口調で私たちに話してくれた。今や彼は200人の従業員を擁する工場を抱えた企業経営者であるが、胸に秘めた夢の実現はまだこれからが本番である。

白さんの起業の動機に、「私利私欲のカネ儲け」という要素が皆無だとはもちろん言えない。明らかに衰退局面に入った日本からやってきた私たちには一種小気味よい感覚すら覚えるほど、「おカネを儲けて豊かな暮らしがしたい」というあっけらかんとした豊かさへの夢を人々が抱き、そこから生み出される民衆のエネルギーが中国社会全体に充満しているように感じることも事実である。けれども森田のように「すべての論理はカネが優先」とバツサリ言い切ってしまうと、そこにあるかなり重要なものが見えなくなってしまいう危険性がある。

白さんの話を聞きながら私が感じたことは、これまで良くも悪くも大きな政治の道具として翻弄され続けてきた中国の若者世代が、初めて「個」としての「自己実現」の欲求に目覚めたのではないかということであり、才能とチャンスに恵まれた青年たちにとってその自己実現の回路が今はビジネスに集中しているということである。さらにそこには、自分たちのビジネスの成功が中国社会のよりよい未来を切り拓いていくことになるという自負と、国家主義や民族主義とは次元の異なる一種の「愛国的感情」さえもがあるように思う。

こうした自立心旺盛な若者たちのビジネスへの過度な傾斜は、政治過程からの彼らの排除と表裏一体のものである。だが、脱政治化した彼らも、自らのビジネスを通して再び政治の現実と対峙しなければならない状況に遭遇しつつある。党や国家の古い官僚機構や法制度、さらには利権と賄賂にむらがる役人の存在が、彼らのビジネスを妨げる場面が多々あるようだ。制度にはない「税」負担の重圧や、許認可権を盾に

した役人の横暴と怠慢と腐敗など、白さんは「やれやれ、まったくどうしようもない」といった諦め口調ながら、率直かつ具体的に語ってくれた。

折しも、影響力低下が著しいといわれる中国共産党は、私営企業家も黨員として認めるという方針を打ち出し、彼らの体制内への取り込みを狙っている。古い革袋に新しい酒を入れようとするかのようなこの方針が、自由を自己実現の不可欠の前提条件と考える「ポスト天安門世代」の若者たちや白さんのような志ある若い経営者にとって魅力あるものと映るとはどうにも考えることができない。それでは新しい政治の可能性が経済の動向とも絡んでどこからどのようにして生まれてくるのか、次の局面の見通しはまだ見えてこない。

黄金の三角地帯（ゴールデン・トライアングル）

第2回の視察旅行のハイライトは、延吉とその先の国境地帯の視察である。

延吉市は、かつて間島と呼ばれ抗日運動の盛んだった延辺朝鮮族自治州の州都である。図們江の支流が市の中心部を貫流するこじんまりした地方都市・延吉にも、改革開放以後あちこちの都市で見られる再開発の波が押し寄せているのか、広い範囲で古い建物が取り壊され更地になり、一部ではすでに真新しい集合住宅群が出現している。2002年に自治州成立（正確には1952年の時点では自治区であり、自治州となったのは1955年）五十周年を迎えるので、再開発はその記念事業でもあるらしい。

延辺朝鮮族自治州全体の人口は約200万人といわれるが、かつては70%ほども占めた朝鮮族の人口は近年減少の一途をたどり、いまや40%を切るまでになっているらしい。そこには漢民族の流入という事態もあるのだが、むしろ大きな原因の一つは朝鮮族の少子化である。中国のいわゆる一人っ子政策は漢民族にのみ適用されるもので、朝鮮族にそうした制約があるわけではなく、したがって少子化の原因は政策的圧力によるものではない。詳しい理由は分からなかったが、どうやら朝鮮族は「産めよ殖やせよ」の多産化の方向ではなく、「少なく産んで大事に育てる」という生き残り戦略を暗黙のうちに自発的に採用しているということのようだ。それほど豊かともいえないこの辺境の地で、また漢民族の一部からは口には出さないが必ずしも対等の存在とは見なされていないフシもある朝鮮族の人たちが、子弟の教育に非常に熱心に取り組んでいるということも聞いた。そうした努力のかいもあってか、中国の少数民族のうちでは朝鮮族は一定の地位と豊かさを築いており、条件のある人々はさらに豊かな暮らしを求めて自治州を離れ、山東省や遠くは上海まで移住しているのだという。そこには、中国に進出した韓国企業が、言葉の通じる朝鮮族を従業員として優先的に雇用するという事情もあるらしい。少子化に加えてそうした州外移住（さらには海外への流出）が、自治州における朝鮮族人口の減少の要因になっている。

朝鮮族の人口が半数を割り込んだとはいえ、自治州では朝鮮語が中国語とともに公用語とされ、延吉の街の看板でもハングルと漢字とが法律にもとづいて必ず並記されている。自治州政府も朝鮮族の人口流出に手をこまねいているわけではない。地域経済の活性化の鍵を、ロシア・北朝鮮・韓国・日本と国境を間近に接する地の利に求

めて、東北アジア経済圏の確立を視野におさめた国際経済交流の要の位置を占めようと考えている。

そこで私たちは、「黄金の三角地帯（ゴールデン・トライアングル）」と呼ばれる国境地帯に位置する琿春市まで視察に出かけた。延吉から琿春までは高速道路が建設中で、現在は途中の図們までが開通しているが、できたばかりということもあってか、車の往来はまだまばらである。低木が一面冬枯れて茶色く凍えた沿道の山々を見ながら、車は図們で高速道から一般道におり琿春をめざす。

図們市郊外の並木道を走っていると、突然後ろからパトカーがサイレンをならして停車させられる。事情はよく分からないが、とにかく来いということで先ほど通り過ぎた道路沿いの交番まで引き返す。

今回の延辺訪問をお膳立てしてくれたのは、吉林大学東北アジア研究院の教授で自治州政府にも顔の利く李玉潭先生であり、そしてこの琿春視察に同行してくれているのはその教え子で延辺の青年組織の幹部である。もちろん琿春市政府にも話は通じている。

マイクロバスに私たちを残して交番の中で中国側同士のやりとりが続き、ややあって「無罪放免」ということになった。何でも、図們市内でマイクロバスを見た誰か（公安？）から不審車両がそちらに向かったとの通報があったらしい。真相はよく分からなかったが、この一件は国境地帯の緊張感をわれわれに強く印象づける出来事であった。

琿春市で経済開発区の担当者から説明を聞き、進出してきている韓国や日本企業の工場を見学した後、いよいよゴールデン・トライアングルの突端まで行く。

図們江に沿って続く道に入ると、対岸に見えるのはもう北朝鮮である。図們江は一面凍りついていて、河の手前半分（中国領）ではときおり氷に穴をあけて魚を捕っている人や氷上を道路代わりに通行している人を見かけるが、北朝鮮側には人影も集落らしいものもほとんど見えず、荒涼とした山肌が凍てついた表情を見せているだけである。

生命の危険をおかして国境の河を渡り中国側に逃れてくる北朝鮮難民のビデオ映像などを見ていた眼には、のどかとすら映る風景であったが、考えてみるとこんな人目につく道路沿いの場所でノコノコ国境を突破するような愚を犯す難民はあるまい。そうした面の事情に詳しい人に後で聞くと、やはり難民が渡ってくるポイントはここからかなり離れたところだとのことである。この冬の難民の状況はどうか知りたかったが、共青の幹部が中国政府にとっても微妙な問題についての質問に喜んで答えてくれるとも思えなかったし、変に警戒されても困るので聞くのをひかえた。

やがて車は国境監視所に到着。敷地には「守東北前哨揚中華国威」という江沢民国家主席の言葉を刻んだ石碑が建つ。一般の観光客が来られるようなところではないはずだが、われわれのような視察団の訪問は時々あるのか、監視所の屋上展望台になっていて土産物コーナーまで設けられている。

展望台から見渡した光景は、予想していた以上に感動的なものであった。左手前

方、眼下の鉄条網の先はもうロシア領で、町の建物が手に取るように見える。右手に流れる図們江の向こうは北朝鮮領で、ロシアとの間をつなぐ橋が遠くに見える。そして見晴るかす前景を縁取っている地平線あたりにかすかに見えるのが「東海」、すなわち私たちが呼ぶところの日本海である。

この眼の前に広がる自然が、国家という人工物によっていくつにも分断され排他的に領有されているという厳しい現実と、しかしながらやはりそれは本来一つながりのものでしかありえないだろうという思いが交錯する。

通常私たちが慣れ親しんでいる南から北を見上げるという構図とは逆に、北から南を見るこの地点に立った私の脳裏に、以前に見た南北を逆転させた東アジアの地図が鮮明に浮かび上がってきた。視角を転じることで、裏が表になり分断が連続に一変するマジックのようなあの地図の光景の実物を、私はその時見ていたことに気づいたのである。「一衣帯水」——東北アジア圏というそれまでは言葉でしかなかった観念が、にわかに色彩を帯びた実体あるものとして私の胸に落ちてきた。

その思いは、眼前の風景だけによって突然触発されたものではなかったろう。この2回の視察旅行で体験した文化や民族を異にする多くの人々との出会い、そして2度目の旅の行程をここまで共にした日本人、韓国人、在日韓国人、中国人で構成される視察団の面々との交わりのいわば総決算としてこの光景があったのだと言えよう。

東北アジア圏の交流は、当面は経済的な次元で、したがってそれぞれの国家の思惑や利害に縛られて進んでいかざるをえないだろう。しかし物の交流は人の交流抜きにはありえない。互いに異質な文化を負った人と人との交わりが、やがて国境を分断する壁を越えた民衆の連帯を生み出す時、私たちはようやく21世紀にいくばくかの光明を見ることができるようではないか。9・11事件の衝撃をひきずりながら暮れようとする2001年の12月27日、私はそのような思いを心に反芻しながら、「黄金の三角地帯」を後にした。